

③ ヴェーダとインド・ヨーロッパ語族の文化

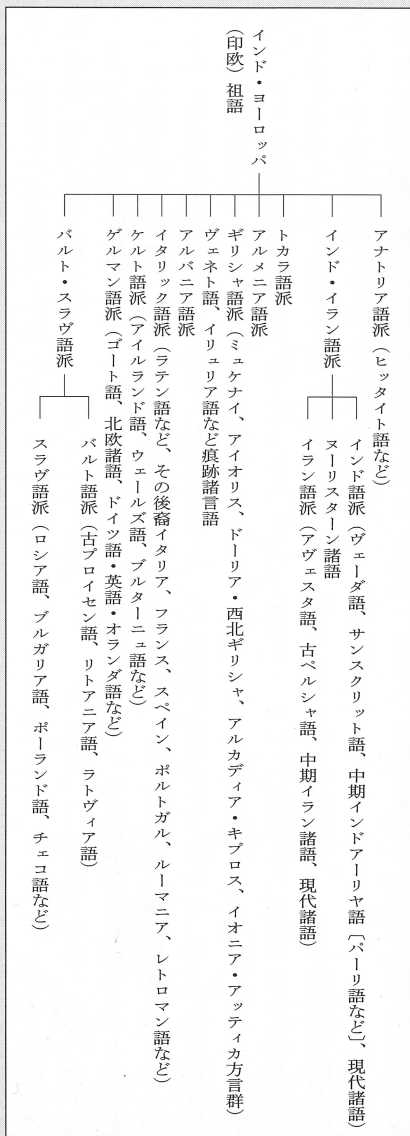
後藤敏文

東北大学大学院教授

「アーリヤ」の人びとは紀元前一五〇〇年頃から、牛、馬、ヤギ、羊の遊牧をしながら、アフガニスタン方面からカールルの峠を越え、部族単位で順次インド亜大陸に入ったものと思われる。祭司たちは伝統に立脚した言語文化を担っており、インダス河川群上流域に進出して、今日まで伝わる神々への讃歌集『リグヴェーダ』を編集した。讃歌の背景には、真実に「合っていること」(リタ「天理」)を表明することば(ブラフマン)には実現する力が備わっているという観念があった。彼らの「インドアーリヤ語」は、「インド・ヨーロッパ(印欧)祖語」から、イランとの共通祖語段階を経て展開したことが明らかになっている。「イーラーン」は「アリア人たちの(国)」を意味する複数所有格に起源し、インドに入った諸部族は別の派生語形「アーリヤ」を自称していた。

神々の世界は、古来の「天にある」神々(デーヴァ)と、社会制度を神格化した「アスラ」たちとから成り立っていた。後者はインド・イラン共通時代に遭遇した強力な文化圏から移植したものと思われる。イランでは特に重んじられ、一部はザラスシュトラが打ち立てたゾロアスター教の背景を成している。例えば、ヴァルウナは王権の神格化で、アフラ・マズダー「主である知恵」はこの神を基礎に作られたと推定される。ヴァルウナは仏教の水天すいてんとして我が国にも伝わった。

ギリシヤや北欧の神話などから知られるヨーロッパの神々の中には印欧祖語の語彙ごいに遡さかのぼるものがある



が、むしろ脇役的要素の中に残されている。印欧語族が携えていた神々の多くは、進出した各地で先行文化との融和が図られる過程で姿を変えた。理論的分析やおおまかな仮説はさておき、神話や宗教を構成する諸要素を具体的展開の中に位置づけて確認する作業は、個別文献学が深めてゆくべき今後の課題である。印欧語族という概念は音韻対応、音韻法則を基礎とする言語学上の概念から出ており、神話や社会制度の研究も言語研究に基礎を置く。ヴェーダ、サンスクリット、パリー語研究の主要成果も、印欧語比較言語学とインド文献学との結合の中で達成されてきた。